掟光寺だより

令和5年
9月号

行事案内

●9月23日（土）
「秋季彼岸会」
13時30分から

琵琶のたとえ

もう秋のお彼岸の時期がやってきますね。有名なたとえ話「ヴィーナ（琵琶）のたとえ」を紹介。

お釈迦さまの弟子にソーナという弟子がいました。彼は、弦楽器ヴィーナ(東アジアでの琵琶)の名手でした。しかし、元々裕福な家で両親に甘やかされて育ったため、自分の足で歩くことをせず、そのせいで足の裏の皮がブヨブヨに弱ってしまいました。

修行の一つに「経行（きょうぎょう）」というものがあり、これは歩きながら行う瞑想です。ソーナは他の修行者と同じように経行をするのですが、足の裏の皮がブヨブヨであったため、すぐに破れて血が噴き出し、彼の修行場は血だらけになったそうです。

余りにもつらいので、出家をやめて還俗しようと思い、お釈迦さまに伝えに行きました。するとお釈迦さまはソーナに「そなたは出家をする前は琵琶の名手だったな?」ソーナが「はい」と答えました。するとお釈迦さまは「ソーナよ、琵琶の弦が張りすぎの時、その琵琶は弾きやすかったり、良い音を奏でたりしただろうか?」と聞くとソーナが「いいえ」と答えました。するとお釈迦さまは、「では、琵琶の弦が緩めすぎの時、その琵琶は弾きやすかったり、良い音を奏でたりしただろうか?」と聞くとソーナは「いいえ」と答えました。

そこでお釈迦さまは「では、ソーナよ。琵琶の弦が張り過ぎでも緩めすぎでもなく、ちょうどよい具合になっている時、そなたの琵琶は弾きやすかったり、良い音を奏でたりしただろうか?」と聞くとソーナは「その通りです」と答えました。お釈迦さまは「ソーナよ。まさにそれと同じことなのだ。度（しょうじん）を超した精進は心を帰らせるし、精進が少なすぎれば懈怠（けたい）を招くのである」

中道（ちゅうどう）とはなにか?・

このたとえ話はお釈迦さまの教え「中道」を説明したお話です。では、中道とはなんでしょう?

中道とは「怠らず、張り詰めず」ということ。しかし、これだけの説明だと中道は右と左があるとき、真ん中を進むものだと誤って解釈してしまいます。これらは「中庸(ほどほど)」という考えであって、仏教でいう「中道」とは異なります。

例えば、琵琶をはじめ、ギターや三味線など弦楽器には複数の弦があります。それぞれの弦は同じではなく「太い」か「細い」かの違いがあります。それらを考慮しないですべて同じ張り具合だと良い音は出ません。それぞれの弦にはそれぞれにあった張り具合があるのです。修行に於いても同じである人は歩く瞑想が合っていたとしても、ある人には座って行う瞑想が合うこともあります。その人にあった最良の方法でさとりへと向かって歩んでいくのは仏教における「中道」です。

これは「目薬と胃腸薬とどちら正しいか」という問いによく似ています。答えは言わずもがな、「目の病気の人には目薬が正しく、胃腸が弱った人には胃腸薬が正しい」のです。

仏教では古来からこれを「応病与薬（おうびょうよやく）」(その人の病状に応じて最適の薬を与える）と言って、その人に合った教えを説くことをお釈迦さまは大事にされてきました。

ただ1と3がある時、2を取るように、みんながみんな2をしなければいけないわけではなく、それぞれの人に合った、それぞれの悟りの修行のことを「中道」とはいうのではないでしょうか。